

復元は住民の熱意あつてこそ

広島工業大准教授 金澤雄記さん

各地で城の活用に光が当たっている。普通りの木造で天守の復元を目指す街もある。その中で原爆投下によって失われ、戦後再建された広島城の天守をどう考えればいいのか。米子城のCG再現に携わるなど、城や歴史的建造物を生かしたまちづくりに詳しい建築学者の金澤雄記・広島工業大工学部准教授(44)に議論すべきことを聞いた。(論説主幹・岩崎誠、写真も)

城をどう生かす

―全国の城を巡る現状を、どう見えていますか。

平成10年代から令和にかけて「第3次築城ブーム」と呼ばれています。地方創生も背景にあるでしょう。天守だけで見れば幕末に70ほどの城に残っていたのが明治の廃城令で壊されて21棟まで減り、太平洋戦争中に9棟が焼けました。昭和30〜40年代、空襲で失われた城を中心に鉄筋コンクリート造(RC造)で復

元が進み、平成に入ると木造完全復元の流れが生まれて今に至ります。さらに天守だけでなく城主が住んでいた御殿の復元が、彦根城、佐賀城を先駆けに広がっています。

―なぜ、そうした動きになつてきたのでしょうか。

いま問題になつているのが戦後に復興された天守の鉄筋コンクリートの寿命が来てい

ること。阪神大震災後に新耐震基準を満たさない天守は補強が求められ、そうでなければ厳密には人の中に入れられなくなりました。そこで補強はせずに木造復元へ動き、話題になつているのが名古屋城です。一方で、福山城などは今ある復元天守を改修して使う選択をしました。

―広島城天守は1958年にRC造で再建され、木造復元を求める声があります。

広島市街地で江戸時代を感じる場所は少なく、原爆投下以前の歴史を語る上で城は大事です。三つの選択肢があると思います。一つは今あるRC造の天守を補強して使う。もう一つは一度壊し、復元することです。ただ広島城は国史跡なので文化庁の新しい方針により、史実に基づかない天守は建てられなくなりました。今のようなRC造の復元は不可能で、おのずと木造になるのです。

―残る一つの方法とは。

RC造の天守を壊して何も建てないことです。ああ、と思ふかもしれないが原爆で

天守が倒壊して何もない状況を示すのも歴史の語り方でしよう。広島という都市がどんな目的で何をしたいか、そこから考える必要があります。

―仮に木造復元となれば、何が課題となりますか。

財源の問題もありますが、一番難しいのは100%に近い正確な復元ができるかどうかです。その点、広島城は被爆前の写真が結構あり、さらに戦火を想定して作られた内部の実測図が現存します。どの柱が何でできているか、部材の樹種まで書いていて、復元を目指すのが史料のない城に比べれば恵まれています。ただ復元を目指すにしても

天守復元は、そこが本質ではないと思います。例えば将来、大型ドローンで上階まで人を運べる時代になるとしましょう。その段階で復元の際に設置したエレベーターを取り外せる、つまり「可逆性」が担保されれば消防設備なども含めて必要なものを据え付けることは問題ありません。天守の復元工事では下の石垣をどう傷つけずに済むかの方が喫緊の問題であり、その点は広島城も同じはずです。

―手法はさまざまだとすると、共通するのは観光資源としても期待の高まりです。

3年ほど前から文化財を活用せよ、という文化庁の方針になつています。しかし城を観光目的に役立てるだけならなかなか市民がついてきません。天守復元の目的は城とは何だっただかを正確に知らせることだと私は思っています。

他の地域から来る人たちだけでなく、地元の人たちが城の役割や城下町の歴史を知り、愛着を持つための生涯学習にこそ役立てるべきでしょう。



かなざわ・ゆうき 広島市出身。広島大工学部卒、東京大大学院博士課程修了。長野県飯田市歴史研究所研究員、米子高専准教授などを経て2020年、広島工業大工学部建築工学科准教授。専門は日本建築史、文化財学。「週刊日本の城」などを執筆。

